日刊 動労千葉

79.6.4

No. 137

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二二五八～九・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

動労千葉が2回臨大

労働基本権確立へ大きく前進

6月10日、公労委正式認知へむけ

規約を整備

注目のうちに船出した新生動労千葉の進むべき方向を決める第二回臨大は五月三一日、労働者福祉センターにおいて、二二〇名の代議員・傍聴者（一五〇名）の参加のもと開催され圧倒的成功を勝ちとりました。一四〇〇名が一丸となって闘いぬいた激闘の二ヶ月間の勝利を全体で確認し、当面の活動方針を決定した事については、すでに本紙第一三五号で報告しましたが、今号では各代議員より出された意見と答弁を軸に、その討論の概要を報告します。主に討論された点をあげると以下の点です。

(1)団交権問題について

団交権は労働組合固有の権利である。

一般的に労働組合を結成した場合は、即時、当局側（会社側）との団交権が発生するという固有の権利があって、与えられるとか認めてもらうとかいうものではない。

ー動労「本部」暴力集団の圧力の前に千葉鉄当局は、「団交権問題」で逃げ廻っている。ー

しかし、現実には千葉鉄当局は、われわれ動労千葉の結成に際し、当初は、「一四〇〇組合員が結集している証拠を示せ」と要求し、われわれがただちに一〇〇〇名をこえる団結署名をつきつけると今度は、「公労委の認知が必要」などと逃げまわっている。従ってこのような当局の態度は、理不尽なことである。

この背景には、動労「本部」暴力集団が公然と「動労千葉を認めるな！　団交をするな！」と圧力をかけているからである。

ー当局は、一四〇〇組合員で組織する動労千葉と団体交渉をせざるを得ない。ー

しかし、現実には四月期昇給、二線高架化の訓練、夏季輸送と相次ぐ交渉案件をかかえた千葉鉄当局は、一四〇〇組合員を現実に組織している動労千葉といやが応でも団体交渉をせざるを得ない。

(2)公労委の認知問題について

公労委での認知は、その法的性格上あくまでも労働組合結成の届け出制であって、却下などということはあり得ないこと。従って、今大会において「認知」に必要な規約・規則などを決定し、直ちに公労委に申請する。

(3)未結成支部への対策

六月末結成にむけて全支部との交流オルグなどを、ねばり強くとりくむ。

現実に、団結署名は相当進み、多くの組合員が動労千葉の方針と考え方への理解を深めてきている。

(4)財政問題について

人件費・昇給補償・闘争時の賃金カット補償など現状で充分やってゆける。むしろ「本部」財政基盤の方が危機的だ。

ー新生動労千葉の前進を伝える商業紙ー

きょう公労委に提出

動労千葉が〝改正規約〟認知へ諸準備整う

【正式認知へ前進ー動労千葉第二回臨時大会】

国鉄千葉動力車労働組合＝動労千葉＝（関川宰委員長、千四百人）は三十一日、第二回臨時大会を開き、役員の選出方法など組合規約と規則の一部を改正し、公労委の正式〝認知〟へ向け諸準備を整えた。この結果、改正規約を、きょう一日、公労委に提出する方針で、同五日に開かれる審査会はこれを認め単位組合として認定する見込み。これに対し動労中央本部は〝青い狼〟をねらって動労千葉傘下支部に再建オルグを継続するものと見られるが、動労千葉と国鉄当局との労働条件に関する協定締結（三六協定）には伺の支障もなくなり、運動路線をめぐって闘われてきた動労千葉の独立分離問題は一応の終結を迎えた。

この日の大会で関川委員長は「二万月間の激闘の勝利をふまえ、動労千葉千四百人のさらなる団結をうち固め、一切の組織破壊攻撃を粉砕し、動労大改革、八〇年代労働運動の戦闘的再生にむかって前進しよう」とあいさつ、議事に移った。

動労千葉は独自ストを背景にして去る四月二十五日夜、「賃闘の諸要求については第三者機関の活用を含め引き続き誠意をもって話し合って参りたい」という千葉鉄道管理局の藤田好一総務部長のいわゆる「藤田メモ」を取り付けた。

その後、去る五月十四日、今度は公労委・関東地方調停委員会に「四月期昇給の実施に伴う団体交渉に関するあっせん申請書」を提出し、翌日、口頭要望という形で「速やかに話し合いを開始し、その解決を」というあっせん案が提示され、正式単位組合としての認知へ、おぜん立ては整っていた。

公労委認知の条件としては労働組合法二条の使用者側から経費援助を受けていないこと、第五条二項五号の役員選出は組合員の直接無記名投票により選挙、同六号の総会は少なくとも年一回開催ーが挙げられていた。

このため、今回の大会はこの二つの条項を満たすべく規約の一部改正が議事の最重要課題として提案されたが、約一百人の参加者の中、満場一致で採択された。

また、①十一支部のうち支部結成を行っていない蘇我、佐倉、銚子各支部の結成に向け総力を挙げる②動労大改革に向けた全国オルグを展開③中央本部の中傷、ひぼうには「日刊動労千葉」を軸とした広宣活動強化で対応④ジェット燃料の列車増発輸送計画を拒否し、場合によっては実力闘争を展開ーなど八項目の当面の方針を確認した。

この大会は動労千葉にとって動労中央本部との闘い〝勝利〟へ大きく一歩前進したことを確認する上で大きな意義があり、団結署名約千百、銚子、佐倉支部など内部の未解決の問題はあるものの、片足を中央本部に残したまま、単位労組認知への運びー当局との交渉権確保までは至近となったのは事実。

千葉日報

昭和54年6月1日